

卒業制作解説論文

Tsumugu

なぜ伝統工芸は必要なのか、どのように未来に残していくのか。

このふたつのクエッションに様々な観点から立ち向かう web サイト

指導教官 高橋恭子

早稲田大学政治経済学部政治学科

映像ジャーナリズム・高橋恭子ゼミ

4年 関 秀真

概要

伝統工芸職人への訪問を通じて、マクロ的な視点で見ると伝統工芸業界は衰退産業かもしれないが、それぞれの工房を単体で見ると売り上げを伸ばしている工房も存在することに気がついた。ただ訪問した全ての工房が好調なわけではなく、以前に比べ売り上げが大幅に減少し衰退の一途を辿る伝統工芸品があることも事実だ。そこで現代においても売り上げを伸ばしている伝統工芸品とそうではない伝統工芸品の違いを分析し、現代における伝統工芸の勝ち筋の抽象化を1番のテーマにおいた。

伝統工芸品が現代そして未来でも生き残っていくために必要なことは2つあると結論づけた。1つ目は、マーケティング人材の起用である。好調の工房とそうでない工房を比較するとマーケティングに精通した人材が工房にいるかが売り上げに大きく影響することがわかった。2つ目は孤独から共創するモノづくりへの進化である。多くの伝統工芸職人が制作を孤独の中で行っている。アイデアや悩みを相談する人が周りにいない結果作るのをやめてしまうケースが後を絶たない。そこで地域との共創、他業種との共創、生活者との共創を実現する必要があると考える。

今回のプロジェクトを通じて「伝統工芸を未来に残す意味とは何か」を平行して問いに立てた。インタビューごとにその答えは異なり、伝統工芸を残す意味というのは個人的な感情によるものだということに気がついた。ただ日本にとって伝統工芸の価値とは「物語」であると考えられる。歴史、職人、地域が生み出す伝統工芸特有の物語性はビジネス的な視点から見ても大きな価値であると考えられる。